

第一章 誕生



吉田茂元首相と創業者 村井順夫妻(大磯の吉田邸にて)

メイド・イン・ジャパンの 警備会社をつくる

「君は、日本独自の警備会社を創るべきだ」

昭和39年(1964年)の東京オリンピック競技大会から2か月後の初冬、村井順は、吉田茂元首相にこう言われました。日本の安全は日本人が守る—メイド・イン・ジャパンの本格的警備会社発足が決まった瞬間です。



創業者 村井順

創業者村井順は、明治42年（1909年）生まれ、昭和10年（1935年）、時局が大きく戦争へと傾いていく時代に内務省に入省しました。

福岡県警察部防空課長、興亜院（戦中に内務省が大陸政策推進のために中国に置いた機関）華中連絡部事務官（在上海）、東京都民生局総務係長などを歴任しました。

戦後、昭和21年（1946年）11月からは吉田茂内閣総理大臣（第一次政権）の秘書官を務め、内務省に復帰後は警保局公安第一課長になり、日本の警備警察体制を創設して、国家地方警察本部警備課長に就任しました。

昭和27年（1952年）4月、サンフランシスコ講和条約発効の直前、村井は吉田首相に建言して内閣官房調査室を創設し、初代室長に就任しました。村井は、独立主権国家として日本が再び国際社会に出て行くには、国内外情勢の情報収集・分析を行うことが必須であるとの信念を持っており、「兎の耳はなぜ長い」という言葉は村井が言い出したものです。

その後、警察庁と都道府県警察という現行の警察体制ができ上がり、京都府警本部長、東北管区警察局長、九州管区警察局長を歴任したのち、昭和36年（1961年）に52歳で退官、3

年後に開催される東京オリンピック競技大会の準備組織である「オリンピック東京大会組織委員会」（以下、組織委）に入ります。官僚として26年間、国内の治安の確保と情報収集に力を尽くした村井の手腕は、国を挙げての大イベントで発揮されることになったのです。



1964年東京オリンピック競技大会の体験

昭和39年（1964年）10月に開催された東京オリンピック競技大会は、世界94か国から選手5541人が参加、20競技163種目で15日にわたる熱戦を繰り広げ、日本列島を湧かせました。金メダル16を含む29のメダルを獲得するなど華々しい選手の活躍と、新幹線、高速道路、モノレールの開通や幹線道路の拡幅などインフラ整備の両面から、戦争から復興した姿と経済大国として成長する様子を世界に知らしめました。

国の威信をかけて、なんとしても東京オリンピック競技大会を成功させなくてはいけない、そのためには一つの事件や事故も起こしてはならない。それが退官後、組織委で事務局次長に就いた村井の最大の任務でした。

次長のポストは2人体制で、もう1人は元人事院事務総長の佐藤朝生氏が務めていました

が、警察出身でロジスティクスに長けている村井は、施設、警備、交通、輸送、入場券などを担当し、裏方に回って一切の総合調整を行いました。ワシントンハイツと呼ばれた代々木の米軍居住地区の明け渡し交渉に始まる選手村や競技施設の建設、入場券販売の割り振り、競技マークの作成、選手・役員・VIP輸送のための車の寄付要請、競技記録とその処理のための技術協力要請、外国人相手の両替所の設置、また選手村での食事提供のための料理人手配に至るまで、本当に幅広い分野で折衝に次ぐ折衝の毎日でした。

昭和39年5月31日付けの朝日新聞(夕刊)には、本人のメモから「このままでも東京大会は八十点は取れる自信はある。でも九十点は取らねば——このプラス十点が大変なことだ」との抜粋が掲載され、奮励を伝えています。

1964年東京オリンピック競技大会終了後、村井は事務次長の体験から得たものとして、次の三つを挙げました。

- ① どんなに大きく困難な問題も、誠心誠意、最善の努力を尽くすことで解決できる。
- ② 世界中から来日した方たちに「思いやりの心」でお世話をすると、必ず「ありがとう」と言ってくれた。この「思いやりの心」と「ありがとうの心」は、人種、宗教、イデオロギーを超えて全世界共通のものである。

③ 「1964年東京オリンピック競技大会を成功させる」という同じ目標を持つすばらしい同志を得た。

これらが、のちに当社を創設する際の自信と勇気につながったと述べています。1964年東京オリンピック競技大会は、正しく当社の源であり発展の原動力でした。

吉田元首相の激励と創業

大成功した1964年東京オリンピック競技大会から2か月後の初冬のある日、村井は吉田茂元首相のもとを訪れました。組織委の仕事が一段落し、その後の身の振り方を考えていた折のことです。

……（前略）オリンピックの裏話など一通り話はずんだ後、突然聞かれた。

「これから君は何をするつもりか」

「実は何をしようか迷っているところです。安川会長（注…組織委会長を務めた安川第五郎氏）はどこか公団の幹部になったらどうかといわれるのですが、友人たち

は警備会社を創れとすすめています」

「現在、日本に警備会社のようなものがあるのか」

「二、三年前からスウェーデンの警備会社が日本に進出してきており、だいぶ業績をあげているようです。聞くところによると、イギリスやアメリカの超一流会社も日本進出を企てているようです」

「そんなことになったら日本中、外国資本で警備の網を張られてしまうことになる。君は公団などやめて、日本独自の警備会社を創るべきだ。考慮の余地はないと思う」

吉田さんのお話を聞いているうちに、私の心は決まっていた。

（村井順著 『ありがとうの心』の経営』善本社 より抜粋、一部略）

この瞬間、日本の安全は日本人が守る——メイド・イン・ジャパンの本格的警備会社発足が決まりました。

早速創設準備にかかった村井は、まず、世間が納得するような立派な人物をトップに据えた

いと考え、組織委のトップでもあった安川第五郎氏にお願いしました。安川氏は、安川財閥の創始者である安川敬一郎氏の五男で、優れた経営手腕の持ち主として知られ、戦前、戦後にわたり安川電機の社長、会長を務めたのち、九州電力の会長や九州・山口経済連合会会長も歴任した、財界で村井が最も尊敬している方です。また、かつて村井が初代室長に就いた内閣官房調査室の創設に大きく関わった緒方竹虎元副総理の同級生でもありました。

果たせるかな、このお願いは、わずか一晩で快諾を得ることができました。

次は出資者ですが、村井は日本を代表する銀行にお願いしようと考え、日本勧業銀行の中村一策頭取（当時全国銀行協会会長）を訪問し、会社設立の趣旨を説明したところ、即座にご協力のお申し出をいただき、その後1か月で13の大銀行から出資のご内諾をいただきました。

これには、各行トップが、村井の経歴と熱意から説く警備業の重要性を理解されたことのみならず、吉田元総理のご同意と安川会長の力が効力を発揮しました。

昭和40年（1965年）3月に設置した設立準備室では、村井以下数名が社員募集から研修内容の策定、徽章、制服、制帽、装備品の選定、就業規則の策定、会社登記の準備まで、新しい分野の新しい企業をゼロからスタートさせる作業が手探りで進められました。

そして7月16日、総合警備保障株式会社は誕生しました。社名には、「一流の警備会社はす

すべての警備業務を総合的に実施できなければならない」という意味が込められています。

資本金は2500万円ですが、この額は、「できるだけ小さく集めて出資者への配当を確実に言うこと」という安川会長の指導により決めたものです。社員は40人、本社は千代田区内幸町、国会通りを挟んで日比谷公園に面したビルの2階でした。



第一期生の誕生

7月15日に実施された第1回の入社試験には、400人を超える応募がありました。学科試験のほか心理テスト、健康診断、火災の防止と早期発見を理由に嗅覚検査まで行われており、新興の会社としては、かなり厳しい試験だったと言えるでしょう。

合格者は30人で、約13倍の競争率を突破して採用されたのは平均年齢26歳、元自衛官が8割を占めました。初任給は3万5000円で、当時の大卒初任給の平均が2万4000円でしたから、高待遇は「世界最高水準の警備」と「警備員の地位向上」を目指す気概を表していました。

村井は創業当初から1年後には社員を500人にするという目標を掲げ、毎月警備員（注：当時は「警備士」という呼称でしたが、本書では「警備員」と記します）の採用試験を行いました。1

「ありがとうの心」と「武士の精神」

創業者村井順の精神は、当社の背骨として半世紀にわたり引き継がれてきました。

とくに「ありがとうの心」と「武士の精神」は、いかに時代が変わっても普遍的な経営理念であるとして、すべてのオフィスに掲げてあります。

【ありがとうの心】

人間は社会の中でお互いに生かしながら生かされている——村井には、人間にとって最も大切なのは「ありがとうの心」だという信念がありました。「警備の仕事に携われること」「お客様が当社を信用して契約してくださること」「社員が一生懸命働いて

くれること」に、常に感謝していたのです。

社員も職務上でさまざまな「ありがとう」を感じ、それに報いる精一杯の仕事をお客様に提供してきました。

昭和42年より当社で始まった「ありがとう運動」では、社員・役員による毎月少しずつの積立金と寄託金を原資に、災害時の義援金寄付、社会福祉施設への福祉車両寄贈、盲導犬の育成支援、難民や医療に対する支援等を行っています。

【武士の精神】

「武士の精神」とは、状況に柔軟に対応し、立派な精神と優れた兵法で努力を尽くすという意味です。武

士は、自分の領地や家臣らを守るために絶対に負けない戦いを使命とし、戦略・戦術を練り続けるとともに、自らの名譽や道徳を重んじました。

会社発足に当たり、創業者はこの「武士の精神」を理想としていましたが、実際はまずは自力で生き抜く「野鳥精神」を前面に出して警備市場を開拓し、経営が少し軌道に乗ったところで、「武士の精神」をより強調して今に至ります。

現在、第三の創業期にある当社では、いま一度創業当初の「野鳥精神」に立ち返り、現状に満足せず、新たな事業にも積極的に挑戦し、業容の拡大に務めています。

夕 生 誕 社 會 保 備 警 合 綜

日本における初めての
本格的な警備会社です

○モットー
誠実・正直・努力・迅速

●給与三万五千円上
(含手当)
(24時間休日交代制)

●職務内容
・現金持込の警備
・私鉄の公安警備
・ボクシングガード
・ビル・倉庫・ホテル
・デパートその他の保安
警備

○業務領域
年2、40歳迄
自衛隊・警察・消防出
身者・武道入会者
好む者・特に英語・身体
強健・以前健康で警備
に精励を有する者

○採用・家庭訪問・受試
七月七日に必着のこと
期加通の上立時日試験
所は面接場です

〒4代区西堀町一の一〇二
日比谷会館内
綜合警備保障株式会社
会長 安川 第五郎
社長 村井 順

初めての求人広告
(朝日新聞 昭和40年6月27日掲載)



当時の
入社試験

年後には社員数600人を超え、我が国最大規模の警備会社になっていました。

初期の警備業務

記念すべき最初の仕事は、会社創立の7月16日当日、ホテルニューオータニで行われた日本楽器様(現ヤマハ様)の全国販売店会議における臨時の警備でした。

全国の成績優秀な販売店用の報奨金を守るといふ任務で、多額の現金が山積みになっていく会場を、警備員2人で、しかもまだ制服ができあがっていなかったため私服で警備しました。担当者記憶では、その時の警備料金は2000円で、初めての

売上ということで、暫くの間、封筒に入れて記念に取っておいたそうです。

当時はまだ、警備と言えば「会社を定年後に再雇用した『守衛』や、交代で泊り込む『当直』が行うもの」という程度の認識だったので、契約を取るのには容易ではありません。お客様も試験導入のような部分があり、『実務研修』の名の下に、120レーンを擁する大型ボウリング場の警備を無報酬で請け負ったこともありました。

長期契約第1号は、神田体育館の夜間の「常駐警備」です。

ほどなく、羽田空港の整備工場警備も請け負いました。航空局の許可なく立ち入ることのできないエリアでの任務に、発足したての会社の、実務経験数か月の若手警備員たちは、大変な緊張感を持って臨んだと言います。

ある日、格納庫内で整備中の飛行機から出火し、気づいた警備員が真っ先に消火器を持って機内に飛び込み、火災は無事鎮火しました。現場には航空会社の整備士もいましたが、当時の警備員は「初任研修でとにかく火元確認、初期消火と教わっていたので、反射的に体が動いた」と振り返ります。

創業当初の初任研修は、現役の警察・消防の幹部などから直接初動対処を教わり、それは大変厳しいものだったそうですが、その結果として見事に発揮されたプロ意識、プロの仕事が、

当社の信用を少しづつ積み上げていってくれました。

「契約したビル、工場などを定期的あるいは不定期に巡回パトロールする警備（機動巡回警備）」は、まだお客様がそれほど多くなかったので担当エリアがとても広く、たとえば都内から横浜の日吉あたりまでが一つのエリアで、一晩に200〜300キロの距離を走行するという厳しい任務でもありました。

初めて請け負った大規模警備は、同年9月半ばからの17日間、東京・晴海の東京見本市会場で行われた英国博覧会の警備でした。ファッションショーや貴金属展、美術展、王室に関する展示のほか、ロンドン名物の2階建てバスも都内を走る大イベントでした。

創業2か月の当社では、動員される警備員たちが、通常の勤務が終わった夜間に接客マナーや雑踏整理の訓練を自主的に実施して、このイベント警備に臨みました。海外の博覧会では物品の紛失が相次いだそうですが、英国博はそのような不祥事も一切なく、当社がその後国家的、国際的な大規模イベントを受注する大きな足がかりとなりました。この質の高い警備に、日本への進出を諦めた米国の警備会社があったと言われています。



大学紛争への対応

昭和40年代前半、大学を中心に学園紛争が起こり、その嵐は全国で吹き荒れました。

大学紛争と言えば、東大、日大における大規模な警察との攻防戦が知られていますが、いくつかの大学において当社に警備要請があつたことは、意外に知られていません。

授業料の値上げによる学生の抗議に端を発し、学生自治などをめぐって紛争が起きていた早稲田大学は、昭和41年（1966年）2月に全学無期限ストに突入、多くの警察官が無法な行動の取締りと警戒に当たつたほか、大学側の自主警備として、当社の警備員も投入されました。約2か月半にわたり、多い日で50〜60人の警備員を現場に派遣し、大学本部の警護、バリケードの撤去、学内に泊り込むスト派学生を追い出すための巡回警備などを行ったのです。時に学生との衝突も起き、罵詈雑言を浴びせられたり、石やセメントの塊を投げつけられたりして負傷者も出た厳しい警備でした。

この警備のノウハウは、その後の大阪万博などの大規模警備でも生かされました。



大阪万博 [1970年]



大阪万博の警備

1964年東京オリンピック競技大会の成功を支えた村井には、「国家的な行事には少々の赤字は覚悟でも参加すべきだ」という強い思いがありました。

昭和45年（1970年）3月から、大阪・千里丘陵で開催された大阪万博（日本万国博覧会）は、1964年東京オリンピック競技大会に次ぐ国家的事業で、77か国、国内外124の企業が参加、パビリオン117館、会期中の総来場者数は6421万人に上り、万博史上記録を更新する大イベントになりました。

当社は、万博開催1年前に、会場施設の

工事開始の立柱式を50人で警備したことを皮切りに、工事中から現場に250人を動員しました。会場そばに警備本部と宿舎を設置し寝食をともしながら、会期中は当社からの1500人と2頭の警備犬のほか、同業5社からの1000人による計2500人体制で183日間の会場警備を完遂したのです。各パビリオンにできる行列の整理や、来場者への道案内、お目当ての施設に突進する大勢の人々を「バッファロー作戦」と称して事故のないよう誘導する業務のほか、日本政府館内の「月の石」などは機械警備で守りました。

また、現金護送車襲撃犯やパビリオン掲示の写真にいたずらをしようとした者の逮捕、盗難事故の発見、火災の発見や初期消火活動などで、77件、153人が表彰を受けました。

最高の警備を提供するために

当社グループの新入社員は、まずは警備員になるために、法定の講習カリキュラムを含んだ初任研修を受けることになっています。中途入社員の役員等も例外ではなく、入社時にはこの研修に参加しています。

講義のほか、整列や敬礼、警戒棒操法をひたすら繰り返す「基本教



練」、消防器具の扱いや救命救急訓練、防具をつけて実際に攻撃・防御し合う「ALSOK護身術」など実技訓練が非常に多く、4泊5日で警備員の基本をみっちり叩き込まれます。寝具のたたみ方や整理整頓まで細かなルールの下で過ごし、警備員にふさわしい精神と規律正しい行動、ALSOKグループ社員としての団結心を身につけることも狙いです。

平成27年度、当社研修所では初任研修を含め89種類、全224回の研修を実施、さらに事業所ごとに現任研修を行うなど、各業務、階級などに合わせた教育が行われています。なお、当社の初任研修のノウハウは、

「ALSOK塾」として一般企業にも門戸を開いています。

また、当社では平成18年（2006年）より「ALSOK基準」を制定しています。業務に関して一般よりも厳しい目標値を独自に掲げ、お客様にさらに満足していただける高品質の警備を目指すためです。

たとえば機械警備では、盗難等の警報が鳴ると、法令上は原則25分以上に警備員が到着できる体制でないといけないのですが、当社ではこれを20分にすればB基準達成、15分だとA基準達成といった具合で、現在の当社の平均は14分台です。

そのほか、さまざまな警備の現場に配置する公的資格取得者の割合を法定の1.5〜2倍にしたり、救命、消防、工事などの公的資格取得者の割合も高めるなど、最高の警備を提供すべく、努力を重ねています。